

人生のボーナス

本郷 ジョータロ

1 人生の審判

ぼくは友だちが少ない。

周りからもそう言われているけれど、ぼくはたいして気にしていない。なぜなら、本当は友だちを作ろうとしていないからだ。そもそも、小四になって塾に通いだしてから遊べる時間がへったのだ。どうせ一緒にいる時間がないなら、最初から友だちなんて作らない方が楽だと思う。まあ、少しはさみしいと思うけれど、べつにたいしたことじゃない。放課後は毎日塾で、今日も塾に向かって商店街の中をいそいでいた。

ピー！ ピピピピー！！

とつぜん、笛が鳴りひびく。

「そこ、白線よりさがってください！」

ぼくに向かって誰かが言った。立ち止まり、

足もとを見る。道にひよろひよろの白い線がかいてある。

なんだろう、これ。

顔を上げると、緑のジャージ姿の女の人が立っていた。髪を一つにむすび、首から赤い笛をさげ、白いスニーカーをはいている。体育の先生だろうか？ 大学生のいと同じ年くらいに見える。

「あの……。あなたは？」

「私？ 私は人生の審判をしています。ミヤモトと言います。大宮駅の宮に、本屋の本つて書く宮本ね」

女の人が白い歯を見せて笑った。

「はあ……」

この人、ちよつと変わった人かな……。

「けっしてあやしい者ではございません」

まゆげをキリツとさせて、きっぱり言い切られたけれど、見るからにあやしい……。

「ぼく、塾があるので……」

くるりと向きを変えて、かかわらないで逃

げることにした。

ピピピピピピッ、ピーッ！！！！

「だから、白線からはみ出したらダメだって言っただじやないの！　白線は『止まれ』の意味なのよ！」

え？　足もとを見るとまた白い線がかいてあった。なんで？　そして、後ろにいたはずの女の人がいつの間にかぼくの前に立っていた。やばいぞ、この人。

「えっと、何でしたっけ、人生の……」

「審判です」

人生の審判ってなんだろう？　サッカーでもあるまいし。こんな時にかぎって商店街を歩いているおとながないなんて……。宮本と名のった女の人がぼくに顔を近づけて言う。

「人生にもルールがあるんです。私は悪質な反則にレッド、危険なプレーにイエロー、しんしてきなフェアプレーにグリーンカードを出しています」

「はあ……」

「で、あなたはみごとグリーンカードを10枚集めたので、ここからボーナスステージに入ってもらいます！」

どこから出したのか、宮本がカスタネットをりょうてに持っていた。そして、カチカチ鳴らしながら、クネクネと変なおどりを始めた。

「ボ、ボーナスステージ？」

「はい」

宮本がウインクした。

「きほんてきなしつもんなんですけど、あなたは誰ですか？」

聞いて、けいさつに言わなきや……。

「おかしなしつもんするのね、私は神です。」

女神です」

宮本がむねの前でうでを組み、ふんつと鼻息をあらくした。

「はあ……」

その時、宮本の後ろをクラスメイト数人が横切った。ぼくが助けを求めようと手をあげ

た時、誰かが言った。

「しっかし、あいつ、つきあい悪くなったよな」

「あー、翔のこと？ 仕方ないよ、受験組なんだから」

翔はぼくの名前だ。そして、クラスに翔はぼくしかいない。ぼくは思わず手をさげ、宮本のかげにすっとかくれた。心臓がドクドクと音をたてている。そんな風に思われていたなんて、知らなかった。ぼくは見つからないようにみんなに背を向けた。すると、今度は正面に澤田が立っていた。澤田は今年となり町から引越して来たクラスメイトだ。同じ塾に通っているけれど、ほとんど話したことはない。成績が良くてクラスの女子には人気だけど、誰と仲が良いのかなぞだった。分かっているのは受験のライバルであるということだけだ。澤田に変なところを見られてしまったなあ……。

「あの、ぼく、本当にいそいでいるので」

小さな声で宮本に言うのと、ぼくは全速力で走ってその場から逃げだした。

「待ちなさい！」

後ろから宮本のさけぶ声がする。ぼくはふりむかずに、走った。走って走って、しばらくしてから立ち止まり、商店街をふりかえる。商店街の向こうに大きな青空が見えた。いつも通り晴れやかできれいだったけれど、今日は何かが足りない気がした。いつもだったらすがすがしく感じる青空なのに、今日は悲しい色に見えた。夏の青空を悲しく感じたのは生まれて初めてだった。

2 ボーナステージ

次の日は雨だった。

雨の日はバスで塾に行く。バス停の花だんのひまわりが雨にぬれてうなだれている。ひまわりとなりには、同じ塾に通う女子グループが立っていた。その中に、一人、もの静

かにいつもほほえんでいる女の子がいる。ちがう学校の、名前も知らない子だ。今日は赤いカサを持っている。女子グループの奥には澤田が黒いカサをさして立っていた。ぼくは赤いカサの子に視線をもどした。

「あの子が気になるの？」

とつぜん宮本がぼくの肩越しに顔を出す。

「うわあ、どっからあらわれたの？」

今日の宮本は全身あずき色のジャージだった。ジャージが好きなのだろうか？

「ふふふ、神ですからどこからでもあらわれるんですよ。そんなことより、あの子のこと、好きなんですね？」

宮本がぼくをじっと見たので、ぼくは目をそらした。この人、本当に神様なのかな……。そうだとしたら、もう逃げられないか……。：

「す、好きな訳ないだろ」

それに、宮本、声がでかいよ。聞こえたらどうするんだよ。

「でも、いつも見えていますよね」

「……」

いいだろ、見るくらい。それから、宮本はいつもぼくのことを見ているんだね……。

「言ってみたらどうですか？ ボーナスステージなんだし」

ボーナスステージっていったいなんなの？

「あ、こっち見ましたよ。もしかしたら、気があるのかもしれないね」

そんなことってある？ ぼくが顔をあげる
と本当に目があった。するとあの子がすぐに
目をそらした。ちよつとはずかしそうにして
いる。なんだかドキドキした。宮本がぼくの
せなかをそつとおした。

え？ 宮本がもう一度せなかをおす。

えええ？ どうしろっていうの？ あの子も
ぼくを見ていた。そこで、ぼくはしんこきゅ
うをして、思いきって一歩前にふみだした。

「バス、行っちゃいましたね。いいんです
か？」

宮本が走って行くバスに手をふっている。
ぼくはバス停のベンチにすわったまま動けなくなっていた。

「どういうことだよ……」

「塾にちこくするなんて、初めてですね」

宮本はのんきに時刻表を見ている。

「宮本がボーナスステージだって言うから話しかけたんじゃないか」

あの子はぼくが前に立ったら、小さくなつて「ごめんなさい」と言った。ぼくは話しかけることすら許されなかった。

「ボーナスステージなのはまちがいないです。でも、だからといってあの子と仲よくなれるとはかぎりません」

はいいい？ 人のせなかをおしておいて、なんてやつだ！ まあ、宮本の性格からして、モテそうにない。そんな宮本の言葉にしたがつたのが大まちがいだっただ。ぼくは宮本をにらみつけた。

「なんですか、その顔は」

「神様でもウソってつくんだね」

「いいえ、私は何もウソをついていません。神様はウソをついたらいけないことになってるのでね」

「……」

「だから、なんですか、その顔は」

一発パンチしたい気もしたけれど、神様をなぐったらバチが当たる気がした。だから、ぼくはべつのしかえしの方法を考えた。

あれ？ さっき、ウソをつけないって言ったよね？ ぼくは少し考えて、いいことを思いついた。思わず笑みがこぼれてしまう。

「宮本はウソをつけないんだよね？ じゃあさ、しつもんがあるんだけど……」

「はい」

宮本がニコニコしている。

「宮本ってさ、カレシいるの？」

ぼくの言葉に宮本の表情がカチコチとかたまっっていく。やっぱりね。モテなさそうだもんね。ぼくは宮本をまねして言った。

「なんですか、その顔は」

そして、じーっと宮本を見た。宮本が口をもごもごと動かす。ぼくは耳をそばだてて聞いた。

「……い、いません」

宮本がりょうてで顔をおおう。耳まで真っ赤になっている。

「だろうね」

「な、なんて失礼な」

「はずかしがらなくっていいって。うんうん」

ぼくは宮本の頭をなでた。

「神様だからってかんぺきじゃなくてもいいんだよ。じょうしきにとられる必要はないんだから。ぼくらはモテない。現実から目をそむけたらいけないよ。ここは一つ、みとめておきましょうよ」

「ううう……」

それから、どっちがよりモテないかを言いあらそっている、塾に向かうバスはすぐに

やってきた。そして、バスに乗りこむと、不思議と女の子にフラれた気持ちの前向きにきりかわっていた。塾に向かうバスなのに、ぼくはこのままどこまでも行けそうな気分になっていた。ぼくは小さな声で「ゴーゴー自分」とつぶやいていた。

3 夏にしたいこと

夜ご飯のそうめんを食べ終えて、リビングでむぎ茶を飲んでいると母さんが言った。

「翔、今年の夏、したいことある？」

母さんはお皿をカチャカチャ音をたてて洗っていた。うちは共ばたらきで、母さんはいつもいそがしい。ぼくは少し考えて言った。「今年は海もプールも花火も無くていいよ」すると皿を洗う音が止まった。母さんが顔をあげる。

「そう？」

気づかうような表情だった。でも、少しう

れしそうでもあった。ぼくが塾に通うようになって友だちと遊ばないでいることを母さんは心配していた。でも、それと同じくらい塾に通っていることをよろこんでいた。受験が終わるまでのガマンだ、ぼくは自分にそう言い聞かせて、むぎ茶をひとくち飲んだ。窓べにつるした風鈴がちりんと鳴った。風鈴の下にミニひまわりが見える。ぼくが毎年プランターに植えているのだ。夜のひまわりは、くらやみをぱつと明るくする。見ていると気持ちがかかるくなる。ぼくは飲み終えたコップを母さんにわたすと自分の部屋にもどった。勉強机の前にすわる。

「夏、遊ばないんですか？　ポーナステージなのに」

また宮本だ。今日は全身青のジャージ姿だった。いったい、何枚ジャージを持っているのやら……。

「急に出て来ないでよ」

宮本は本当にどこにでもあらわれる。でも、

どうやらその姿はぼくにしか見えていないらしい。いつまでぼくにまわりつくのだろうか……。。

「急じゃありません、ずっと前からここにいましたよ」

いやいや、それもこわいってば……。でも、ぼくは本当は何がしたいのだろう。本当にしたいことかあ。あらためて考えてみる。あんがいたくさんのことが思いうかんだ。

「ぼくだって、本当はしたいことくらいある。ゲームだってしたい。マンガも読みたい。映画もキャンプも行きたい。本当はサッカーだって続けていたかった……。」

話はじめると、きりがなさそうだった。ふと、机の上にあるサッカークラブの集合写真が目に入る。ぼくはサッカークラブの中心選手だった。だからこそ、写真の真ん中にうつった自分の笑顔が悲しく感じられた。

「でも……。塾をやめたいとは言わないんですね」

宮本が写真たてを手にとり言う。

「だって……」

ぼくは目の前に広げたテキストとノートを
見て言った。

「今やらないで後でこまるのもいやだし」

「感心ですね。でも……、それでいいんです
か？」

宮本がぼくの顔をのぞきこむ。正直に言う
と心の中はもやもやしていた。でも、そのも
やもやをふっきるように言った。

「いいんだ。自分で決めたんだから」

イスから立ち上がり、ベッドにねころぶ。
前はてんじょうに好きなサッカークラブのフ
ラッグをはっていた。でも、今はもう無い。

「大人ですねえ」

宮本がぼくのとりにねころんだ。宮本が
何か言うのかと思いついていたら、スースー
寝だした。宮本さん、あなたは何がしたいの
ですか？ でもこんな調子の宮本を見ている
となやむことが無意味にも感じられてくる。

ぼくはベッドから起きあがった。なやんだつてしようがないこともある。そうわりきつてイスにすわり、えんぴつを持つ。

「もう勉強するから、どこか行ってくれる？」

ベッドに向かつてふりむくと、宮本はすでに起きあがっていた。

「はいはい、分かりましたよ」

宮本がドアを開けて出て行こうとする。いねむりはみじかい時間だったのに、宮本の髪にはりっぱな寝ぐせがついていた。ぼくは宮本の寝ぐせを見て、ふと思う。

「宮本ってさ……」

宮本がぽかんと口を開けてふりかえる。

「母親っぽいよね」

にやりと笑うと、宮本が目を丸くした。

「わ、私は花のどくしんです！」

「知ってるよ。まあ、今年の夏はカレシを作るところからがんばるしかないね」

ぼくが舌を出すと、宮本がこぶしをふりあ

げて言った。

「こらー！ 神様をおちよくるなー！」

それからぼくたちは二人で笑い合った。変な神様だけど、ぼくには友だちのようだった。そしてふと思う。神様とすごす夏って、すごい夏だなと。

4 ミニひまわり

放課後、いそいで下駄箱に向かっていると、澤田と会った。でも、ぼくらはあいさつをせずにすれちがった。

「あのですね」

また宮本だ。今日のジャージはむらさき色だった。どこで買ったのだろう……。

「だから急に出て来ないでよ」

「翔くんには友だちがいないのですか？」

「え？」

「だって、学校ではクラスメイトにかこまれてますけど、放課後と休日はだいたい一人で

すよね」

言われなくてもそんなことくらい知ってるよ。

「なぜですか？」

「遊びにさそわれてもどうせ断るだけなんだから、友だちなんていない方が楽なんだよ」
はつきり言い切った自分にまんぞくしていた。うすっぺらい、うわべだけの付き合いなんて、ぼくはまっぴらごめんだ。すると、チャイムが鳴った。五時になってしまった。もうバスじゃないと塾に間に合わない。

「まずい！ 遅れちゃうから近道するよ」

ぼくはくつをはいて校門を出ると、横断歩道ではない所をわたってバス停に向かった。左右を確認せずに車道に出たので、宮本が大声をあげた。

「ダメですよ！！！」

「うるさいな。分かったよ」

宮本にふりむいたしゅんかん、目に飛びこんで来たのはせまって来る車だった。

うそ？！ 車の中で、大きく口を開いている人が見えた。

キキッー！ ものすごく大きなブレーキ音が鳴りひびく。そして、どんつとにぶい音がして、目の前がぼんつと暗くなった。

「そろそろ起きてください」

誰？

「もういいんですよ」

なにが？

ゆっくり目をあけると光がまぶしい。まわりがよく見えない。

ここはどこ？ ぼくはどうなったの？

誰かがぼくの頭をなでた。じよじよに目が光になれてくる。まわりがはっきり見えて来ると、目の前にいるのが白いジャージ姿の宮本だと分かる。ぼくはおそるおそる声を出した。

「ぼく、生きてる？」

宮本がやさしく笑い、うなずいた。

「ちやんと生きてるわ」

よかったー。ぼくは体を起こした。ぼくは病院のベッドの上にいた。ほっとしたら、思わず涙がこぼれた。ガラガラと音がして、病室のドアが開く。ミニひまわりの花びんを持った母さんだった。

「え？　翔！　翔！　先生！　翔が起きました！」

母さんが叫び声をあげて先生を呼びに行つた。母さんの泣きだしそうな顔を見て、本当に助かったことを実感する。ぼくは助かったんだ。本当に良かった。

「今日も誰もおみまいに来なかつたですね」
病室の窓の外に大きな入道雲がうかんでいる。黄色のジャージを着た宮本がベッドわきのイスにちよこんとこしかけている。
「そんなもんだって、ぼくだって誰かのおみまいに行ったことなんて無いんだし」

ぼくは誰かにおみまいに来て欲しいとは思

っていなかっただ。道路に飛び出したのは自分
なんだし、ケガは右足をくじいただけという
奇跡的なかるさだったんだから。実はそれは
それで、少しはずかしくも思っていた。

「でも、この花は……」

宮本が見た先に、ミニひまわりがかざって
あった。

「ひまわり、ぼくの一番好きな花なんだ。見
てると元気が出るよね」

家のミニひまわりをお母さんが持って来た
のかもしれない。

「ひまわりって太陽にもにてるよね」

ぼくはひまわりを見た後、窓の外を見上げ
た。まぶしくって、目を閉じる。太陽光線で
ほほがじりじりとやけるようだった。でも、
夏はそれが気持ちいい。

「なんか、私もひまわりが好きになったわ。
とくにミニひまわり。やさしさがぎゅっとな
まっている気がするから」

自分が好きなものを、他の人が好きだと言

つてくれたことがうれしかった。まあ、宮本は人ではなく神様なんだけど。そしてふと思う。宮本は少しひまわりになているな、と。

5 人生のボーナス

入院は三日間ですんだ。ぼくは松葉づえもなく手ぶらで学校にもどった。

「翔、大丈夫だったか？」 「心配したぞ」

「ケガ、ひどくなくて良かったな」

教室に入ると、クラスメイトが口々に言った。ぼくは一人ひとりに、ありがとうと言って席にすわった。しせんを感じて横をみると、澤田がぼくを見ていた。

「なに？」

「なんでもない」

澤田はそう言うと、机から教科書とノートを出して、予習を始めた。みんなは心配してくれたのに、澤田はよかったねの一言も言わなかった。ぼくは腹が立った。

「あのさ、ぼくが学校にもどってこない方がうれしかった？」

次のしゅんかん、澤田がぼくに向かってノートを投げつけてきた。

「バカやろう！ そんなじょうだん、二度と言うな！」

とつぜんの大声に教室が静まりかえる。澤田はそのまま教室を出て行ってしまった。なんなんだよ、あいつ。

澤田はその後、授業にはもどらなかつた。次の休み時間、一人で窓の外を見ていると、宮本がとなりにきた。今日はさくら色のジャージを着ている。

「翔くん。病室にかざってあったミニひまわり、誰が持って来たか聞いてないんですか？」

「え？」

「かれですよ。入院して翔くんが目をさますより前、誰より先にかれが来たんです」

宮本のしせんの先に、中庭のベンチにすわ

る澤田がいた。

「あいつが？」

澤田がそんなことするはずがない。澤田はむしろぼくのことをきらいなんだと思っただ。それなのに……、なんで？

「本当の友だちってなんでしようか？　じょうだんを言ったり、楽しくもりあがったりするだけが友だちですか？」

そう言われてぼくはとっさに返事ができなかった。ぼくの考える友だちって、どんなものなのだろう……。

「友だちには決まった形なんて無いんですよ」

宮本がやさしくほほえんだ。

「澤田くんは転校して来る前の学校ではサッカー部のエースでした。でも、今は受験のためにサッカーもやめて友だちを作っていますせん」

そうだったんだ……。

「翔くんは忘れてるかもしれないですけど、

澤田くんが転校して来た日、教室の移動で困っているところに声をかけたのはあなたです。あたり前にそういうことができることをたたえ、私は100枚目のグリーンカードを出しました」

まったくおぼえていなかった。

「かれはそのことをずっと忘れていません。かれはそういう人です。本当は、一番分かり合えるのが、かれなのかもしれないですよ」だからおみまいに来たのか……。澤田は一人ベンチで教科書を読んでいた。周りには遊んでいる子ばかりだ。澤田だけ、静かな時間の中にいた。

「さてと、これで私からのボーナスステージは終了です」

宮本が大きくのびをした。

「え？ 終了？」

ぼくは宮本を見た。宮本がすつと近より、ぼくの心臓に手をそえた。ドクンドクンと心臓が動いている。

「助かったじゃないですか」

そういうことだったのか！　それがボーナスだったのか！

「でも、それだけじゃありません。むしろここからが本番です。自分でボーナスチャレンジを成功させてくださいね」

え？　ボーナスチャレンジ？

「翔くん、あなたはみりよくてきです。あなたにはこれから長い人生が待っています。だからこそ、よりすてきな人生にしてくれる仲間を作って欲しいのです。友人は人生のボーナスなんですよ。ちなみに、大事なのは人数ではありません。私もね、神様の世界で一人しか友だちがいないのよ。でも、それで十分だと思ってる」

宮本がふふふと笑った。友だちが人生のボーナスか……。ぼくは受験のために、友だちをあきらめた。でも、受験があってもできる友だちもいるということか。今まで澤田が友だちになることなんて想像したことがなかつ

た。これまでの友だちとタイプが違いすぎたから。でも……。

ぼくが澤田を見ていると、宮本にせなかをそつとおされた。しばらくすると、またそつとおされて、一步前に足が出る。

「おすなつて」

ふりかえると、もうそこには宮本はいなかった。強い風が吹いて、目をつむる。

え？ まさか、宮本行っちゃったの？

「大丈夫、あなたなら、できるよ」

空からそう聞こえた気がした。そして、ぼくは宮本がもうあらわれないということをとった。急にさみしい気持ちになった。宮本はいきなりぼくの生活に入りこみ、あいさつも無くいなくなったのだ。自分かってすぎるよ、宮本。

宮本とすごした短い日々が思い出される。いつもとつぜんあらわれておどろかされたこと。でも、宮本はかならず大事なタイミングにあらわれて、ぼくを一人にしなかったこと。

宮本はぼくが言えずにいること、やれずにいることのせなかをおしてくれた。その結果、失敗に終わることもあったけど、それでもいいんだと教えてくれた。毎日が新しいことや笑いにあふれていた。まあ、宮本は何色ジャージを持っていいのか、それだけは結局分からなかったのだけれど。

ぼくは目を閉じて太陽を見あげた。じんわりと温かく、宮本を感じた。そして、ぼくが生きていることも感じた。生きているなら、したいことをしよう。やっぱりぼくも友だちが欲しい。今年の夏だって、今年なりに楽しくすごしたい。ぼくは心に決めて、澤田のいるベンチに向かった。セミが鳴いている。青い空には白い入道雲が立ち上っている。ひまわりが風にゆれている。そして、澤田の前に立つ。

澤田がベンチにすわったままぼくを見上げ、おどろいた顔をする。澤田はサッカーが好きだ。ぼくもサッカーが好き。澤田は勉強がで

きる。ぼくも勉強をがんばりたい。澤田はがまんをしてでも努力をしている。ぼくもそうだ。ぼくらが友だちになるとしたら、遊びにいったり、だらけたりする仲ではない。一緒にがんばる友だちだ。澤田は思い返すと、ずっとそんな感じでぼくの側にいた。今までの友だちとはちよつと違ったタイプだ。でも、だからこそ、ぼくは友だちになりたいと思っ

た。
「澤田、あのさ……」

ぼくが言いかけると、強い風が吹いて、ぼくは思わず目を閉じた。また話をはじめようとした時、澤田が先に口を開いた。

「いいよ」

澤田はぼくをまっすぐ見ていた。どういうこと？ 何について「いい」と言ったの？

教室でのこと？ それとも……。

「友だちになろう」

澤田がはつきりと言った。おどろいた。言わなくても思いが通じていた。ぼくがぼーっ

としていると、澤田が笑った。澤田が笑うのを初めて見た気がする。ぼくはうれしくなつて、澤田のとなりにすわった。すわった後も、ぼくらはしばらくだまっていた。それでもぼくらは十分だった。ふと足もとを見るとひろひろの白い線がかかっていた。宮本のしわざだろう。白い線は『止まれ』の合図だったはずだ。これは、どういうこと？ 宮本は何を言いたいのだろう。すると、その後、白い線がすうっと消えた。そういうことか。白い線が消えた、それはつまり『すすめ』の合図だ。これが、宮本からの最後のメッセージかもしれない。進もう。いつせいにセミが鳴きだした。ぼくの本当の夏が、今、始まった、そんな気がした。